

四万十町の光を発信するフリーペーパー

vol.

りぐらんと 14



TAKE FREE



このまちにはいろいろな光がある

大きいものから小さいもの、強いものから弱いもの

そんな光の反射角度を変える

私たちだからこそ見える光を発信していきます

りぐる「念を入れる」

時には全力を出して、時には力を抜いて

右に左に傾いて、それでいいんだ

りぐらんとりぐらんと

四万十町の光を発信するフリーペーパー

りぐらんと

もくじ

01 小さな布の表現者

02 D I Y力の高い
高知の男性たち

03 四万十町の山登り

04 四万十食材図鑑

05 あの店の、モーニング

01

小さな布の表現者 理容師かつ押絵作家 伊与木潤子さん



筆者が初めて潤子さんの押絵を見たとき、今にも動き出しそうな繊細で臨場感ある作品に、気づいたら引き込まれていました。四十町在住でありながら日本全国を回り、展示を行っている押絵作家の伊与木潤子さん。今回は、そんな素晴らしい作品の数々を、今なお作り続ける小さな布の表現者を紹介すべく、お話を伺いました。



プロフィール

1946年に四万十町（旧窪川町）に生まれ、学生時代を地元で過ごし、20歳で結婚。それを機に、旦那さんの家業である理容店を夫婦二人三脚で始められます。

4人のお子さんを持ち、子育てと理容店の仕事にまい進する中、あるきっかけが潤子さんを押絵の世界へと導くこととなります。



押絵を始められた きっかけ

もともと布好きだった潤子さんは、子育てが落ち着いた頃、たまたま夫婦で高知市を訪れた際に日本を代表する人形作家の辻村寿三郎氏の人形展へ立ち寄り、その作品に大変感激されたといいます。布でこれだけのものを作れるのか、こんな関わり方ができるのか、と。この作品を見なかつたら、まず押絵を始めなかつたらろうとおっしゃっていました。

辻村氏の当時の作品に、はがきの上に布で作られたウサギの飾りがあり、「これだったら自分でも上手く作れるのではないか」と思い、試行錯誤して作ったことがきっかけだそうです。



り返せる」と、作品に込められた思いを語られました。

・日曜日

約3年かけて作り上げた大作で、幼少期に父に連れられて初めて行った高知市の日曜市をイメージした作品。「何でも売っているしすごい人！どこからこんな人が集まってくるのだろうか？」ともものすごい衝撃を受け、幼い頃のたった一度の記憶を頼りに作成にあたったといえます。総勢700人の人物を作り、ストーリー性や人、色のバランスを考えながら人物をわけ、配置しているそうです。

作品に込める思い

最初は楽しいを第一に作品作りを行っていた潤子さんですが、ただ楽しむだけではなく人間の生活



作品名 『日曜日』



や暮らしを伝えたい、と思うようになったといいます。特に忘れられてしまふ「その時代その時代」を大事に見据えておきたい！という思いから、自分の生まれ育った昭和の時代を、今まで見てきた生活を、そのまま素直に作品に再現しています。

また、潤子さんの作風として、押絵で作られる人物には顔が描かれていません。そのため、人物ひとりひとりの体つきや仕草、姿勢などからその人の年齢や何を考えているのか、会話など、すべて理解してもらえよう工夫しています。

布に込める思い

潤子さんのおばあさんは布を大切にされる方だったそうです。おばあさんは「布は3cmあったら大豆一つ包める。ボロ

でも継げるから捨てるものではない」というのが常だったそうで、潤子さん自身もいつしか布を大切にするとという習慣が染みついていました。作品で昭和の時代を表現するにあたって、使い古した布や端切れ、襦袢といった捨てられそうな布をわざわざ集めて使っているそうです。「布にも命があり、生きています。この命を預かった限りはちゃんと仕上げないといけない」と、布に込める思いを語られました。

今後の展望

これまで30年にわたり、数々の押絵を作成してこられた潤子さん。昭和の時代に生きる大人を表現した作品は作り終えたといわれますが、子どもの作品は未だ作られていません。そこで、現在は『昭和の時代に生きる子供』



Editor / Miwa Nakashita
Photographer / Takahiro Hashimoto

をテーマに作品作りに励んでおられます。

令和を迎えた現在ですが、潤子さんは「見てないものを想像で作ることは考えられない。自分が見て、触れて、育った『昭和』という時代を伝えていきたい」と、今後の作品作りの意気込みを語られました。

結び

今回、潤子さんの取材にあたり初めて押絵という世界を知り、その奥深さに大変興味を持ちました。潤子さんは布好きが高じて押絵の世界へと入り、すべて独学で習得されたというので、本当に驚きです。70歳を超えられた今もお、現役で作品作りに勤しまれる潤子さんに、今後も注目していきたいです。

DIY 倶楽部

四万十町に移住してはや3年、本誌の最後の執筆にあたり、地元の方たちにお伝えしておきたいことがあります。それは高知県の男性たちの「ものづくり力」が高いことです。透明ポリカと木材でできた物干し場や倉庫、ウナギのコロバシやくくりわな獺の道具など、趣味や仕事に必要なものを自作する方が大勢います。金曜日の夕方、自宅でバーベキューを楽しむ光景が見られるのも高知ならではの、両者には共通したのを感じます。そこで今回は、DIYライフを地で行く達人たちをご紹介します。

Editor / Yutaka Kishi

Photographer / Takahiro Hashimoto

02 — DIY力の高い高知の男性たち

ジブリの自作グッズがいっぱい

やすおか
安岡 辰雄さん

一人目は窪川中津川の安岡辰雄さんです。

お宅の近くを車で通りがけると、ジブリ好きの方なら一目で「サツキとメイの家」とわかる洋風の建物が目に飛び込んできます。

その建物に案内されたところ、お部屋の中はトトロのグッズでいっぱい。安岡さん自身がジブリ好きで、町外にいるお孫さんの気をひくため、息子さんの協力を得てこの館を作り、関連グッズの多くも自作されたそうです。

館の中でひと際目立つのが、開口部に描かれたトトロのアニメの絵。アクリル樹脂にペインティングが施されたもので、「これぐらいの絵なら、絵心のない方も描けますよ」と、安岡さんはにこやかに話されます。





異国情緒が漂う 不思議な空間

山の斜面を造成して生み出された敷地には、洋風の建物が軒を連ねるほか、洋風庭園もあいまって、異国にタイムスリップしたような錯覚に陥るほどの手の込みようです。

安岡さんのものづくりの守備範囲は、建築物とエクステリアから、家具、インテリア、雑貨、ミニチュア、アウトドアグッズに加え、音を奏でる楽



サツキとメイの家をモチーフにした建物

器まで自作。個人のDIYって、ここまでできるものなのかと感心してしまいます。

DIYのきっかけ

安岡さんがDIYにハマる契機となったのは約30年前のこと。長男と次男のお二人がやんちゃ過ぎて、高知市内の街中の自宅では遊ばせる場所がなかったところに奥様が三人目を妊娠。ちょうどその頃、現在の自宅用地を自由に使っていたいと親戚が声をかけてくれ、別荘を新築したことがDIYの始まりだそうです。

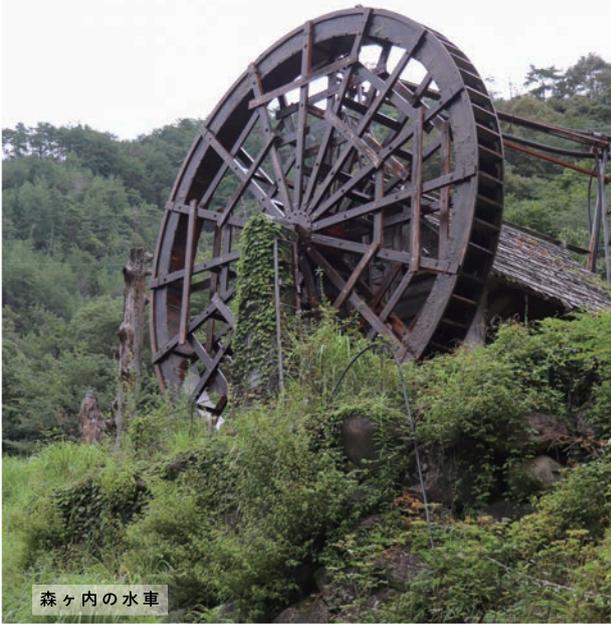
安岡さんが長らく従事されていたのは塗装業。建築設計から社会人生活をスタートされ父親が経営する塗装会社は、ダムや橋梁といった県内の主要な公共工事も手掛けるほど技術力が高かったそうですが、50代

半ばにして会社をたたまれ、DIYの世界に転身されま

家具と工芸品の 受注生産も

安岡さんは、「DIY倶楽部」という商業看板を掲げ、「カントリークラフト」と名付けた工房を拠点に、カントリー調の家具と工芸品を受注生産されるほか、リフォーム工事を請け負うこともあります。

安岡さんはDIYについて次のようにおっしゃいます。「ものづくりは、やる気さえあれば誰でもできます。性能が高い電動工具も出回り、ホームセンターや100均に行けば、あらゆる原材料が手軽に手に入る時代。自分で作ればプロに頼む3分の1の価格で実現できますよ」とDIYライフを勧めてくれました。



森ヶ内の水車



親族宅の法面工事



土木も建築も何でもこなす

はやし
ひろみつ
林 広光さん

もう一人のDIYの達人は、大正田野々の林広光さんです。林さんの代表作は、大正森ヶ内の木製水車。森ヶ内を一度でも訪ねたことがある人なら、その端正な佇まいの水車は、通りがかった人の心を一瞬で捉えて離さないほど趣があつて印象的です。

DIYのルーツ

今年78歳を迎えた林さんのDIYのルーツは父親の叶さんにあるようです。ご自身より手先がさらに器用で、兄妹の嫁入り用の家具まで手作りされたそうです。お父さんが如何に器用な方だったかが伺えます。

林さんは中学校を卒業後、30歳で旧大正町の役場職員になるまで家業に従事され、父親と多くの時間を過ごす中でのづくりの力を培われます。森ヶ内をフィールドにした15年間のお仕事は、土地改良と林業のほか、苗木づくりや栗の栽培といった農業にも従事され、接ぎ木の技術力は相当の腕前ようです。

土地改良は、農地を重機で大区画化するものですが、当時は、「字号」と呼ばれた集落内の共助で行う公共事業で、森ヶ内集落の住民の皆さんが、年ごとに当番制で実施した土木工事にも無給で携われたそうです。

取材先は森ヶ内の土木工事現場。親戚が住宅を新築するための住宅用地の造成を自ら買って出られたとのこと。法面に積まれた石は、庭石ほどもある大石を鉄製の矢とハンマーで一つずつ打ち割って作られたと聞き、気が遠くなる思いがしましたが、林さんは苦にならないようです。



親戚にとつては 便利屋さん

取材先に居合わせた義理のお姉さんに、林さんのものづくりについてお尋ねしたところ、「(林さんは) 何をお願いしても嫌だと断ることはなく、便利屋さんのように何でも引き受けてくれて助かるんですよ」と話してくれました。

林さんのDIYの守備範囲は土木工事、建築、電気工事、水道工事、屋根工事など多岐に



わたります。建築物では、四万十高校の木造宿舍や木屋ヶ内の親戚宅もログハウスで建てられています。

木製水車は夢の実現

冒頭に紹介した木製水車は二代目とのこと。一代目を作ろうと思ったきっかけは、子どものころに叔父さんが製材用に作った巨大水車への憧れから。ある時自分も作ってみたいと衝動にかられて製作。図面を書いて材料を組み立てた後、クレーンで吊り上げるなど、試行錯誤しながら完成させたそうです。

林さんにとってDIYとは、自らの生きがいであることは言うまでもないほか、男のロマンを叶え、自らの探求心や好奇心を満たす存在のように思いました。

むすび

いざ、DIYに挑戦しようとした場合、現代は、インターネットで専門知識を容易に入手でき、原材料はホームセンター等で安価にそろい、製作ハードルも優れた工具のおかげで低下しています。皆さんも、DIYをライフスタイルに取り入れてみてはいかがでしょうか。



四万十高校の宿舍

03

第9回 矢立街道 四万十町の山登り



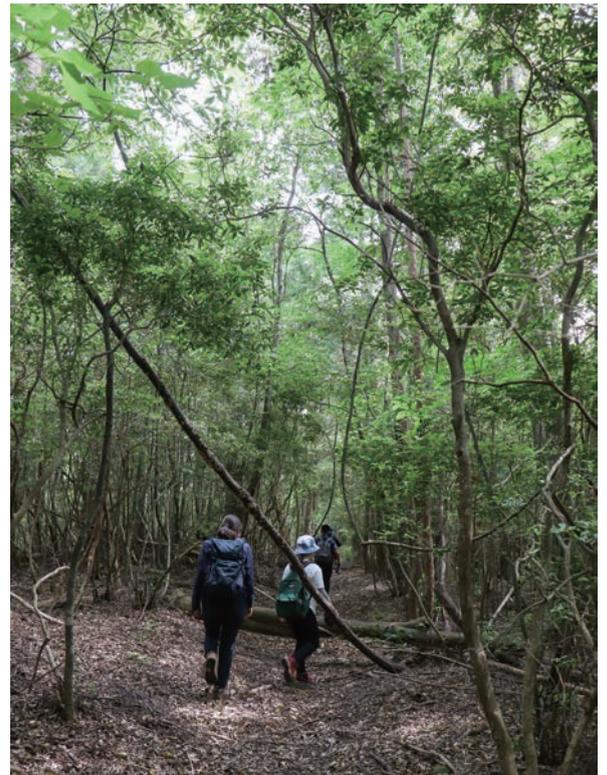
Editor / Kenichi Yoshida
Photographer / Takahiro Hashimoto

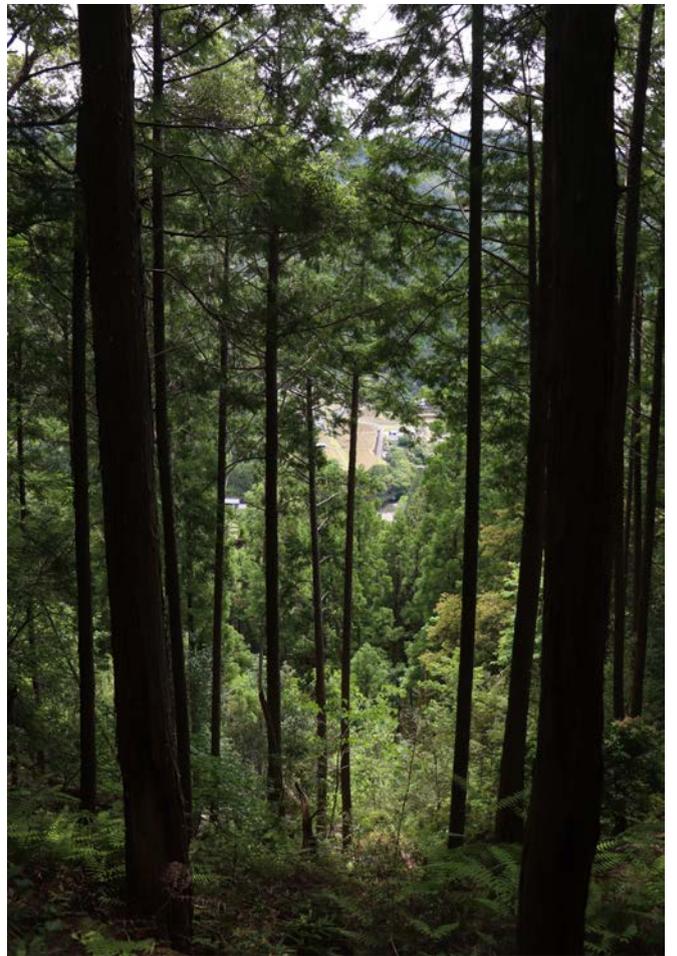
四万十町の「山」の魅力を皆さんに紹介すべく結成された「協力隊登山部」。今回は四万十町の山々に残る古道である「往還道」の一つ、矢立街道を歩きました。

矢立街道は大正大奈路と大正中津川を結ぶ古道です。四万十町には、舗装された道ができる前に使用されていた山道が各所に残っており、往還道と呼ばれています。この矢立街道も往還道の一つで、今回は四万十川と

梶原川が合流するポイントから、国道439号を梶原川沿いに5分ほど進んだ、大正大奈路をスタート地点として登り始めました。

峠を一つ越えることになる矢立街道、往路は峠の尾根筋を避けて中腹あたりを迂回するルートを通りました。途中分かれ道がいくつもありますが、広い林道を選べば迷うことはないと思います。分かれ道はそれぞれ木屋ケ内、八足、下道、大正中津





川、松原と周辺の集落へとつながっています。

30分ほど登った場所に、頭の灰皿が逆さに取り付けられた木の杭がありました。これはいったいなんだろう？と不思議に思っていました。地元の方に聞くと、これは句碑で風景を味わい、俳句を読みたくなった時に書いて指しておけるように据えられたもの、ということでした。さすがにかつての幹線道路だけあって、アップダウンは少なく、息を切らすことなく折り返し地点の大正中津川へ到着しました。

中津川の山道の入り口で昼食をとって弾みをつけた復路。折角なら別ルートを通ろうと山越えを試みました。きつい勾配を越えて尾根筋には問題なく入れましたが、尾根筋から再び林道に入るときに道を見失ってしまいました。もはや道ではない斜面に足を取られ、「遭難」の文字が頭に浮かびましたが、木々

につかまりながらなんとか持ち直し、GPSを頼りに林道に戻りました。戻った時には息も絶え絶えとなり、全員が山の怖さを再確認したと思います。

折り返し地点の大正中津川を通り過ぎて、再び林道に入ると窪川地区の春分峠へと往還道が続いています。現在の幹線道路である国道からだ、それぞれの支流を遡り、さらに登ると行き着く場所が、山道でつながっていることを知り、まるで裏道を見つけたような、不思議で興味深い気持ちになりました。

往還道は、登山道などと比べても険しい道が多く、先人の足腰の強さには驚嘆するほかありません。協力隊登山部では、通常の登山に加えて、今回のような往還道についても実際に歩いて魅力をお伝えしたいと思っています。ぜひ今後にご期待ください。

04

家地川の梅しごと 第3回 四万十食材図鑑



Editor / Aki Yoshioka
Photographer / Takahiro Hashimoto

家地川のおばあちゃん直伝の、簡単に作れる梅料理のレシピをご紹介します。「自己流で、ひとつつも計らんきね～」と笑いながら教えてくれたレシピをそのまま掲載しました。なんとなく敷居が高そうな梅料理ですが、この作り方なら大丈夫！アバウトでもきっと美味しくできます。

梅の下準備

青梅は1晩水に浸ける。

へたを取り、包丁で切り込みを入れるか、楊枝で数か所刺し、穴をあける。こうすることで、梅がふっくら仕上がります。



《らっきょう酢バージョン》

教えてくれた人

みやじきょうこ
宮地香子さん。87歳。高知市生まれ。
家地川で宮地商店を60年程営む。

材料・作り方

- ・梅 1キロ
 - ・砂糖 ティースプーン山盛り4杯
 - ・はちみつ ティースプーン2杯
 - ・らっきょう酢 容器の半分ぐらい
- すべてを保存瓶に入れて1年ほど漬ける。

コメント

2～3週間から食べれるけれど、1年ばあ漬けたがやっぱり美味しいね。

《塩漬けバージョン》

教えてくれた人

まきのふみえ
槇野文恵さん。92歳。野地生まれ。
家地川で1番のご長寿。

材料・作り方

- ・梅 500グラム
 - ・塩 小さじ2杯（約10グラム）
- 梅と塩を袋に入れてよくもむ。
それを保存瓶に入れて1年ほど漬ける。

コメント

この塩漬けの梅を刻んで、鰹節とはちみつを少し混ぜたら、美味しいご飯のおかずになるきね。これをやったら食欲のないときでも、ご飯がすすむで。



05 | あの店の、 モーニング

いつもと違う

1日のはじまりを、

四万十町の

モーニングでいかがですか。



国道56号線沿い、緑の建物が目印の喫茶店「Cafe Ten」。14時まで提供される、8種類のモーニングメニューに、お店オリジナルのブレンドコーヒーがお出迎え。からしマヨネーズが隠し味のタマゴサンドはやみつきになる味。地元の方から観光客まで気軽に立ち寄れる、素敵なお店です。

Cafe Ten

金上野 1307-1

定休日 / 月曜日、第2日曜日

営業時間 / 8時～14時、17時～21時

電話番号 / 0880-22-0463



大正駅から徒歩5分。昭和57年の開店以来、変わらない味のモーニングを守り続ける2代目店主の戸田さん。こだわりは自家製ドレッシングで食べるサラダ。昭和の雰囲気を感じられる空間で朝食をいかがですか？ モーニングはトースト550円、ホットサンド600円の2種類で10時まで。

レストハウス「古都」

大正 107-5

定休日 / 日曜日

営業時間 / 8時～15時

電話番号 / 0880-27-1501



土佐昭和駅から徒歩で約5分。レトロな雰囲気漂う喫茶店「pinoco」。地元のお客様はもちろん、県外のお客様からも愛され続け30年。パン屋さんがつくる食パンにこだわったモーニングはトースト、ゆで卵、サラダ、フルーツ、コーヒーがセット。価格は500円で12時まで。

pinoco

昭和 534-1

定休日 / 土曜日

営業時間 / 8時～17時

電話番号 / 0880-28-5608



協力隊便り

志和の岩石蘭

皆さん、こんにちは！ 太平洋に面する沿岸地域の観光振興担当の竹内です。

志和地域では、毎年5月中旬から下旬にかけて、岩石蘭が見ごろを迎えます。この岩石蘭、絶滅危惧種に指定されていて、地元の有志メンバーでつくる活性化協議会が保護活動を行っています。私も協力隊として活性化協議会に参加し、一緒に活動させてもらっています。

5月といえば緊急事態宣言が解除されるかどうか、固唾を飲んで動向を見守っている頃でした。今年は新型コロナウイルスの影響で、志和の岩石蘭の一般公開は控えていましたが、昨年以上に美しい花を咲かせていました。淡い黄色の花が、山中の木陰にひっそりと咲く姿は趣があり、どこか儂げでもあります。



毎年、獣被害や盗掘等で株数の増減に悩まされていますが、今年度は岩石蘭を守るための保護策を設置する予定です。より多くの人に、岩石蘭を楽しんでもらえるように環境整備に努めていきます。

また来年、志和に咲き誇る岩石蘭の一般公開を楽しみにしててください。

*岩石蘭は、志和の各種イベントの際に販売もいたしております。

Editor / Koyo Takeuchi, Takahiro Hashimoto

Photographer / Koyo Takeuchi

Editor / Miwa Nakashita, Yutaka Kishi, Kenichi Yoshida, Aki Yoshioka, Koyo Takeuchi

Photo&Design / Takahiro Hashimoto

Publisher / 四万十町地域おこし協力隊 786-0013 高知県高岡郡四万十町琴平町1-1 TEL : 0880-22-3161

URL : <http://shimantocho-chiikiokoshi.jp/> Date / 令和2年8月発行